



Title	『吾輩は猫である』の材源としてのヴィクトル・ユゴー『ウィリアム・シェイクスピア』：「アイスキュロスの死」の材源再考
Author(s)	五之治, 昌比呂
Citation	日本語・日本文化. 2025, 52, p. 17-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100658
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

『吾輩は猫である』の材源としての ヴィクトル・ユゴー『ウィリアム・シェイクスピア』

—「アイスキュロスの死」の材源再考—

五之治昌比呂

はじめに

夏目漱石『吾輩は猫である』（明治38-39年（1905-1906）、以下『猫』と略記）の第八章（第七章とともに明治39年1月1日発行の『ホトトギス』第九巻第四号に発表）に次のような箇所がある¹⁾。語っているのは猫である。

昔し希臘にイスキラスと云ふ作家があつたさうだ。此男は学者作家に共通なる頭を有して居たと云ふ。吾輩の所謂学者作家に共通なる頭とは禿と云ふ意味である。何故頭が禿げるかと云へば頭の營養不足で毛が生長する程活がないからに相違ない。学者作家は尤も多く頭を使ふものであつて大概是貧乏に極つて居る。だから学者作家の頭はみんな營養不足でみんな禿げて居る。偕〔さて〕イスキラスも作家であるから自然の勢禿げなくてはならん。彼はつる／＼然たる金柑頭を有して居つた。所がある日の事、先生例の頭——頭に外行も普段着もないから例の頭に極つてゐるが——其例の頭を振り立て／＼、太陽に照らしつけて往来をあるいて居た。これが間違のもとである。禿げ頭を日にあてゝ遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風があたる、光かる頭にも何かあたなくてはならん。此時イスキラスの頭の上に一羽の鷺が舞つて居たが、見るとどこかで生捕つた一疋の亀を爪の先に攫んだ儘である。亀、スツポン杯は美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅をつけて居る。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来ん。海老の鬼殻焼はあるが亀の子の甲羅煮は今でさへない位だから、当時は無論なかつたに極つて居る。さすがの鷺も少々持て余した折柄、遙かの下界にぴかと光つた者

がある。その時鷺はしめたと思つた。あの光つたものゝ上へ亀の子を落したなら、甲羅は正しく砕けるに極はまつた。砕けたあとから舞ひ下りて中味を頂戴すれば訳はない。さうだ――と覗〔ねらい〕を定めて、かの亀の子を高い所から挨拶もなく頭の上へ落した。生憎作家の頭の方が亀の甲より軟らかであつたものだから、禿はめちや――に砕けて有名なるイスキラスはこゝに無惨の最後を遂げた。それはさうと、解しかねるのは鷺の了見である。例の頭を、作家の頭と知つて落したのか、又は禿岩と間違へて落したものか、解決し様次第で、落雲館の敵と此鷺とを比較する事も出来るし、又出来なくなる。主人の頭はイスキラスのそのの如く、又御歴々の学者の如くぴか――光つては居らん。

（『漱石全集』第一巻、323-325 頁）

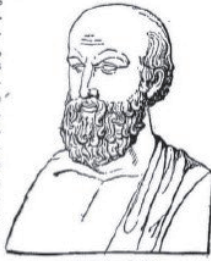
落雲館という私立中学校の生徒たちが、いたずらとしてわざと苦沙弥先生の家で近くで野球をするという話の中でこの逸話が語られる。生徒たちがこのいたずら続けるなら、苦沙弥先生の頭も禿げあがってしまうだろうというのである。もっとも、この逸話が文脈上とくに重要な意味を持っているようには感じられない。引用文中に出てくる「イスキラス」とは、古代ギリシアの悲劇詩人アイスキュロス（前 525/4-456 年）のことである。アイスキュロスの禿頭を岩とまちがえて、鷺が亀を頭の上に落下させたためにこの詩人が命を落としたという逸話であるが、もちろんこれは作り話である²⁾。アイスキュロスの死の逸話は、現代の日本でもそれほど知られているとは言えない。当然、明治時代の日本人がこの話をたまたま耳にするということは、ほとんど考えられないであろう。『猫』を執筆していた漱石は、この奇妙な逸話をどのようにして知ったのだろうか。

稿者はかつてこの疑問をめぐる論考を発表した³⁾。従来、材源の可能性としては次の三つが指摘されていた⁴⁾。ひとつはサー・トマス・ブラウン（Sir Thomas Browne, 1605-1682）『俗謬論』（*Pseudodoxia Epidemica*, 1646-1672）の第7巻、ひとつはウォルター・サヴェッジ・ランダー（Walter Savage Landor, 1775-1864）の書簡体小説『ペリクレスとアスペシア』（*Pericles and Aspasia*, 1836）である。三つ目はある古代辞典であるが、それは有名な古代辞典を大幅に縮約したもので

ある。有名な古代辞典とは、サー・ウィリアム・スミス (Sir William Smith) が編集した *A Dictionary of Greek and Roman Antiquities* (1842), *Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythography* (1849), *Dictionary of Greek and Roman Geography* (1857) という三種類の古代辞典であり、これをもとにマリンディン (Marindin) という人物が、*A Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology, and Geography* (Murray, London, 1899) という縮約版を作って出版した。拙論の結論は、このマリンディンの縮約版古代辞典にあるアイスキュロスの項が、材源として最も可能性が高いというものであった。漱石はこの辞典を所有しており、英国留学中の1901年3月5日に購入したと推測されている⁵⁾。

この結論自体は新しいとは言えない。たとえば、1993年刊行の岩波書店版『漱石全集』第一巻のこの箇所に対する注解は、材源として断定しているわけではないが、「この逸話は、漱石の蔵書中にある『古代ギリシア・ローマ伝記神話地理辞典』のアイスキュロスの項に一説として簡単に紹介されている」(630-631頁)と記しており、この「辞典」は上記のマリンディンの縮約版のことである。拙論の新しい点は、漱石の旧蔵書中の書籍からこの逸話を含むほかの書物も探し出し(ブラウンの『俗謬論』と古代辞典以外に3点見つけた)、それらが材源である可能性を検討した上で、この古代辞典が材源である可能性が最も高いと主張したことである。そのように判断した理由は、ほかの書籍はすべて、材源としての否定的な要素が存在するのに対して、この古代辞典にはとくに否定的な要素がないことであった。また、この辞典には積極的に材源と認めたくなる要素もあり、それはイラストが豊富に挿入されていることである。アイスキュロスの項にも二つ挿入されており、ひとつはアイスキュロスの胸像(27頁:図1)、もうひとつは鷲が彼の頭上に亀を落とそうとしている場面(28頁:図2)である。拙論では「漱石が何かの調べ物の際にこのページをたまたま見たとしたら、このイラストが彼の興味を引き、そのままアイスキュロスの項を読んだという可能性があるのではないだろうか」と書いた。

Aeschylus (*Αἰσχύλος*). 1. The great tragic poet, was born at Eleusis in Attica, B.C. 525, so that he was thirty-five years of age at the time of the battle of Marathon, and contemporary with Simonides and Pindar. His father Euphorion was probably connected with the worship of Demeter, and Aeschylus himself was, according to some authorities, initiated in the mysteries of this goddess. At the age of twenty-five (B.C. 499), he made his first appearance as a competitor for the prize of tragedy against Pratinas, without being successful. His chief rival at this period was Phrynichus. He fought, with his brothers



Bust of Aeschylus.

for his two journeys to Sicily do not follow a defeat. Others said it was because he had been defeated by Simonides in an elegy on those who died at Marathon. If this was so, it is strange that he should have gone to the court



Aeschylus. (From a gem.)

of Hiero only to meet Simonides there after all. Others said that it was because he had divulged the mysteries; others (and this, at any rate, must refer to his second visit to Sicily) because the alarm caused to women and children by the chorus of Furies had raised bad feeling against him. Whatever may have been the cause of his earlier visit to Hiero, the most likely account of his final departure from Athens is that he was disheartened by the failure of his attempt to support the power of

図1 アイスキュロスの胸像

図2 アイスキュロスと鷲

今回、先の研究では気づかなかった新たな材源の可能性を見つけた。それは漱石の旧蔵書中にあるヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 1802-1885) の『ウィリアム・シェイクスピア』(William Shakespeare, 1864) という作品の英訳書である(この作品については本稿の第4章で詳しく紹介する)。著者はもちろん、『レ・ミゼラブル』などで知られるフランスの文豪である。結論を先に述べれば、材源は『ウィリアム・シェイクスピア』とスミスの古代辞典の縮約版の二つであると考えるのが妥当である。また、上記の古代辞典に関する結論自体は翻す必要はないが、「何かの調べ物の際にこのページをたまたま見たとしたら」というところは考え直さねばならないことがわかった。本稿の目的はこうした点を紹介することである。まず、『猫』の第七章、第八章の二つの記述の材源が『ウィリアム・シェイクスピア』であることを証明し、そのことによって、第八章のアイスキュロスの死の逸話の材源もこの書であることを主張する。その上で、材源と『猫』の記述を比較し、漱石の執筆の過程について考察を加える。

1. 「世界で一番長い字」

材源を見つける糸口は思わぬところにあった。アイスキュロスの死について語られる『猫』第八章と同時に発表された第七章に、次のような箇所がある。酔った苦沙弥先生が妻に話しかけている場面である。

「飲むとも。——御前世界で一番長い字を知ってるか」

「えゝ、前〔さき〕の関白太政大臣でせう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字って横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、——御酒はもういゝでせう、是で御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教へてやろうか」

「えゝ。さうしたら御飯ですよ」

「Archaioemelesidonophrunicherata と云ふ字だ」

「出鱈目でせう」

「出鱈目なものか、希臘語だ」

「何といふ字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。只綴り丈知ってるんだ。長く書くと六寸三分位にかける」

(『漱石全集』第一巻、305 頁)

「Archaioemelesidonophrunicherata」というこの長いギリシア語の単語は、古代ギリシアの喜劇詩人アリストパネス（前 445 頃 -380 頃）の『蜂』（前 422 年）に出てくる言葉である（作品の 220 行目）。アリストパネスの新造語であり、中務哲郎氏の訳をお借りすれば「いにしへの蜜さながらに愛らしいプリュニコスのシードーン歌」という意味になる⁶⁾。

漱石はこの言葉をどこで知ったのであろうか。いくら漱石でも、このような長いギリシア語を聞き覚えで書いたとは思えない。なんらかの文献から書き写したと考えるのが自然である。『漱石全集』の注では、漱石が依拠した文献は特定されていない。

ネット社会の現在であるので、「Google ブックス」でこの語を入れて検索してみる。とくに「期間」を19世紀に限定すると、一つの書籍のみヒットする。それはヴィクトル・ユゴーの『ウィリアム・シェイクスピア』という作品の英訳書である（以下、この英訳書を『シェイクスピア』と記す）。東北大学附属図書館のウェブサイトにある「漱石文庫」のデータベースで検索してみると、この書が漱石の旧蔵書の中にあることがわかる。書誌情報は以下のとおりである。

Victor Hugo, translated by Melville, B. Anderson, *William Shakespeare*, London, George Routledge.

出版年は記載がなく不明である。長いギリシア語はこの書の第1部第4巻第2章(99頁)にある。

Students scrawl with charcoal on the wall now in token of admiration, now in irony, some well-known verses, for instance, the singular iambic of Phrynichus in a single word —

“Archaioemesidonophrunicherata.”*

長い新造語の前のところを訳すなら、「子どもたちは木炭で壁に有名な詩行を走り書きする。ときには称賛のしるしに、ときには皮肉として。たとえば、プリュニコスの一語からなるイアンボスの一行である」となるであろうか（イアンボスは詩の韻律の一種）。新造語の後ろにはアステリスクが付いており、脚注としてこの語のギリシア語綴りが挙げられている（これはフランス語原書に従ったものである）。文脈としては、古代の劇場における観客について述べている箇所であり、有名な詩行を壁に落書きする者もいるという説明である。『シェイクスピア』が『猫』の新造語の箇所の典拠だとするなら、この部分の文脈は『猫』においてとくに重要ではなさそうである。なお、ここではこの新造語がプリュニコスの詩行であるかのように書かれているが、もちろん正しくない。同時に、これだけの情報では、この語がアリストパネスによるものであることを知ることはで

きない。

漱石は英国留学中から自分が購入した書籍の情報をノートに記しており、それが残っている。このノートは岡三郎氏と飛ヶ谷美穂子氏によって翻刻されており、容易に参照することができる⁷⁾。ユゴーの『シェイクスピア』は通し番号で887番となっており、購入時期の書き込みはなく購入金額のみ記載されている。この書はRoutledge Universal Libraryというシリーズの一冊のようで、同じシリーズのエドガー・アラン・ポーの作品集とマシュー・アーノルドの『ホメロスの翻訳について』を同時に購入したようである(通し番号が885, 886)。通し番号でこれらの書の少し前の880番にはジョージ・メレディスの『サンドラ・ベロニ』がある。飛ヶ谷氏はこの書の購入時期を明治38年11月から12月ごろと推測している⁸⁾。『猫』の第七章は明治39年1月1日発行の『ホトトギス』に発表されているので、ユゴーの『シェイクスピア』を利用するためには、これを38年の11月には購入していなければならないであろう。『サンドラ・ベロニ』といっしょにRoutledge Universal Libraryの三冊を購入したとすれば、時期的には符合する。

現在、東北大学附属図書館が所蔵する漱石の手沢本は、その中身がマイクロフィルム化されており、容易に閲覧することができる。『シェイクスピア』の手沢本を見てみたところ、40箇所以上の傍線・下線と、25箇所ほどの書き込みが存在し、漱石がこの書を精読したことがわかる⁹⁾。アリストパネスの長い新造語の箇所を見てみると、この語に下線が引いてあった。漱石の関心を引いたことが確認できる。

アリストパネスの新造語を含む『シェイクスピア』は、漱石が明治38年の11月ごろまでに購入した可能性があり、その中の問題の新造語には下線まで引かれているのであるから、『猫』第七章の材源はこの書であると断定してもよさそうであるが、この新造語をほかの文献から知ったという可能性もゼロではないであろう。また、線引きや書き込みがあるからといって、漱石が購入後すぐにこの書を読んだとは限らない。次の章では、より確かな証拠となるものを紹介したい¹⁰⁾。

2. クリュシッポスの死の逸話

『猫』第八章のアイスキュロスの死の箇所少し後に、次のような会話がある。

「昔し希臘にクリシツパスと云ふ哲学者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「其男が笑ひ過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね。然しそりや昔の事だから……」

「昔しだつて今だつて変りがあるものか。驢馬が銀の井から無花果を食ふのを見て、可笑しくつて堪らなくつて無暗に笑つたんだ。所がどうしても笑ひがとまらない。とうとう笑ひ死にゝ死んだんだあね」

（『漱石全集』第一巻、345-346 頁）

友人の鈴木が苦沙弥に「君は陰気すぎるから、笑ったほうがいい」と言うと、苦沙弥が「むやみに笑うと死ぬこともある」と言って、笑いすぎて死んだ人物の例を紹介するところである。

文中の「クリシツパス」とは、前3世紀のストア派の哲学者クリュシッポスのことである。ロバがイチジクを食べるのを見て笑いすぎて死んだという逸話は、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』7.185 が伝えるもので、管見のかぎりこれが唯一の古代の典拠である¹¹⁾。山口義久氏の翻訳をお借りして、以下に引用する¹²⁾。

だが若干の人々は、彼が笑いの発作におそわれて死んだと言う。すなわち、彼のイチジクがロバに食べられたとき、そのロバに水で割らないワインをやって飲み下させなさいと婆やに言ったあとで、大笑いしすぎて死んでしまったというのである。

『猫』の記述では、クリュシッポスはロバがイチジクを食べるのがおかしくて笑い死にしたように語られているが、古代の典拠ではそのあたりがあいまいである。ここには「ロバ」（ギリシア語で *onos*）と「ワイン」（ギリシア語で *oinos*）

の言葉遊びがあるようで、それが大笑いを誘ったとも読める。

このクリュシッポスの死の逸話は、『シェイクスピア』第1部第3巻第4章(87頁)に言及されている。

Chrysippus of Tarsus, who lived about the hundred and thirtieth olympiad, forms an era in science. This philosopher (the same who died — actually died — of laughter caused by seeing a donkey eat figs out of a silver basin) had studied everything, ……

この哲学者は、ロバがイチジクを食べるのを見て、こみ上げてきた笑いのために死んだと述べられている。

『シェイクスピア』の漱石手沢本のこの箇所を見てみると、傍線が引かれている。それだけでもこの書物が『猫』の材源である可能性が高いのであるが、この逸話については注目すべき点がある。それは、『猫』ではロバがイチジクを「銀の井から」食べたと言われていることである。『シェイクスピア』では *out of a silver basin* がそれに当たる。古代の典拠のディオゲネス・ラエルティオスにはそのような記述はない。また、現在もそのような要素が一般的であるわけではない。漱石が「銀の井から」と書いていることは、『シェイクスピア』を読んでこの逸話を知り、それを『猫』に使ったこと的有力な証拠になるのではないか¹³⁾。

第七章と同時期に書かれた第八章に、ユゴーの『シェイクスピア』から取材したと考えられる逸話が使われているのだから、第七章の「世界で一番長い字」も同書から取り入れたものと考えてよいであろう¹⁴⁾。漱石は明治38年11月ごろにはこの書を入手し、すぐに精読したとみて間違いなさそうである。なお、『シェイクスピア』にはこの新造語が「世界で一番長い」単語だというようなことは書かれていないので、「世界で一番長い」は漱石の創作である。

この点を前提とすると、漱石が書いたものの中に『シェイクスピア』を読んだ形跡を見つけることができる。『漱石全集』第十九巻には漱石が残した断片が収められているが、その「断片二六」にその形跡がある。『漱石全集』の説明によると、この断片はある案内状の裏に書かれたもので、その案内状とは東京帝国大

学史料編纂掛による蒐集品の第四回展覧会の案内状である。東京帝国大学総長山川健次郎が漱石に宛てて送ったもので、日付は明治38年10月となっている。この日付は上述の事情と符合する。

この断片の中に次のような記述がある（『漱石全集』第十九巻、171頁）。

Chrysippus———novel

これは上述のクリュシッポスの死に関する記述に目を引かれて記したものであろうか。

そのすぐ後には「Socrates swearing by the dog/ Zeno swearing by the goat」（犬にかけて誓うソクラテス / 山羊にかけて誓うゼノン）と記されている（原文は二行。ソクラテスとゼノンは古代ギリシアの高名な哲学者）。これは明らかに『シェイクスピア』を読んだメモ書きである。対応するのは第1部第4巻第1章の95頁で、その記述によれば、ミラボーはある書棚を持っていて、その二つの角には犬と雌山羊の彫刻をほどこしていた。それは、犬にかけて誓ったソクラテスと、山羊にかけて誓ったゼノンを記念するためである（in remembrance of Socrates, who swore by the dog, and of Zeno, who swore by the goat¹⁵⁾）。漱石手沢本のこの箇所には書き込みはなかったが、漱石の興味を引いたらしい。

この断片にはヌード（裸体画）についてのメモ書きもあり、それは『猫』第七章で使われている（『漱石全集』第一巻、284-287頁）。このメモ書きの中に「十四世紀迄ハ欧人ノ衣服ハ decent デアツタ（Valerius Maximus p 131）」という記述がある。『シェイクスピア』の131頁には、次章で述べるアイスキュロスの死の逸話が語られており、その典拠としてウァレリウス・マクスィムス（古代ローマの著述家）の名が挙げられている。偶然に何かの数字が一致した可能性もあるが、そうとは考えにくい。東北大学附属図書館のデータベースによれば、漱石はマクスィムスの著作を所有していなかったようである。図書館などの書物を使うにしても、ヌードに関してウァレリウス・マクスィムスの著作を参照する必要性は考えられない。また、『シェイクスピア』の131頁にはヌードに関係するような記述はない。よって、「p 131」は『シェイクスピア』のページを指し、ヌードに関する

メモとは関係なく漱石が書いたものだと考えるのが自然である。アイスキュロスの逸話の箇所を後で参照するためにメモしたものであろうか。

繰り返しになるが、以上のような事実から、漱石が明治38年11月ごろまでに『シェイクスピア』を入手してすぐに精読し、そのいくつかの箇所を『猫』の第七章と第八章に利用したことは確実であると言える¹⁶⁾。

3. アイスキュロスの死の逸話

『シェイクスピア』には、アイスキュロスの死の逸話について触れている箇所がある(第1部第4巻第10章、131頁)。

[we know] from Valerius Maximus that an eagle killed him by letting a tortoise fall on his head

古代の詩人、著述家などを典拠に挙げ、アイスキュロスについて「我々は……から……ということを知っている」という文を重ねて、この詩人の逸話を紹介している部分である。ここでは「ヴァレリウス・マクシムスからは、鷲が亀を彼の頭の上に落として彼を死なせたことを知っている」と述べられている(フランス語原文は *par Valère-Maxime, qu'un aigle le tua d'une tortue sur la tête*)。

『シェイクスピア』の漱石手沢本のこの箇所には下線が引かれている(この箇所から始まって、後ろの二つの逸話まで引かれている)。漱石はこの部分を読んで強い印象を受けたと思われる。本稿の第1章、第2章で示したように、『猫』第八章の執筆時に漱石が『シェイクスピア』を精読していたことは確実であるから、下線が引かれていることも考え合わせれば、第八章のアイスキュロスの死の逸話の材源は『シェイクスピア』のこの箇所であると考えるのが自然であろう。

しかし、『猫』の記述を見てみれば、『シェイクスピア』のこの一文では情報が足りないことがわかる。古代の伝承において、鷲が亀を落下させたのはアイスキュロスの禿頭を岩と勘違いしたからなのだが、そのような要素が『シェイクスピア』には語られていない。『猫』では、禿頭についてかなりの紙面が使われているから、材源にはこの情報が必ず含まれていなければならない。

おそらく、漱石は『シェイクスピア』のこの記述を読んで、なぜ鷺が亀をアイスキュロスの頭の上に落としたのかと疑問に思ったのであろう。詩人の死に興味を持った漱石は、より詳しい情報を求めたと思われる。その場合に最もふさわしいのは、漱石が所蔵していたスミスの古代辞典の縮約版である。この辞典のアイスキュロスの項には、『猫』の記述を書くために必要な情報がすべてそろっている（『猫』ではいろいろと脚色されているが）。以下に詩人の死について書かれた部分（28 頁）の訳文を示す。

彼の死に関するよく知られた話、すなわち、一羽の鷺が詩人の禿頭を石とまちがえて、亀の甲羅を割ろうとしてその亀を頭の上に落としたという話は、宝石に表現されている。

「はじめに」で示したように、この項にはアイスキュロスの死の場面を描いたイラストも挿入されている（図2）。そのイラストは、上の引用の「宝石」を描いたものである。漱石は、この古代辞典によってより詳しい情報を得て、『猫』第八章にこの逸話を挿入したと考えられるのである¹⁷⁾。

先に述べたように、前回の拙論ではスミスの古代辞典の縮約版について、「漱石が何かの調べ物の際にこのページをたまたま見たとしたら、このイラストが彼の興味を引き、そのままアイスキュロスの項を読んだという可能性があるのではないだろうか」と書いた。しかし、漱石は「何かの調べ物の際にこのページをたまたま見た」ではなかった。『シェイクスピア』の記述で詩人の死の奇妙な逸話を知り、それについて詳しい情報を得るためにこの辞典を参照したと考えられるのである。以上が「アイスキュロスの死」の材源に関する今回の新しい結論である。

4. ユゴーの『ウィリアム・シェイクスピア』と漱石

ユゴーの『ウィリアム・シェイクスピア』は、1864年にパリとブリュッセルで出版された¹⁸⁾。そのとき著者の名前は記されていない。当時、ユゴーはナポレオン3世の弾圧を受けて亡命生活を送っていた。ユゴーの序文には

「Hauteville-House, 1864.」とあるので、ガーンジー島で書かれたもののようだ。この長編評論は、もともと息子のフランソワ＝ヴィクトル・ユゴーによるシェイクスピアの翻訳作品集の序文として構想された。しかし、最終的な姿は、タイトルから想像されるようなシェイクスピア論とはかけ離れたものになっている。全三部構成で、第1部第1巻はシェイクスピアの生涯を扱い、第2部第1巻と第2巻はシェイクスピアという人間とその作品を扱ってはいるが、全体としてはシェイクスピア以外の事柄が圧倒的に多く、論理性のない混沌とした著述になっている。シェイクスピア論というよりは「天才」論、より大きく言えば芸術論と捉えた方がよさそうである。

第1部第2巻は「天才たち」(LES GÉNIES)と題されており、ヨブ、イザヤ、エゼキエルといったキリスト教関係の人物に加えて、ホメロス、アイスキュロス、ルクレティウス、ユウェナリス、タキトゥス、ダンテ、ラブレール、セルバンテス、シェイクスピアをとくに取り上げ、それぞれに一節を当てて記述している。もちろん、ユゴーはほかにも天才と呼ぶべき人物を考えているが、なぜかこれらの人物が選ばれている。

その中でもアイスキュロスは特別な扱いを受けているように見える。著作のいたるところで言及されており、とくに第1部第4巻は「古代人シェイクスピア」(SHAKESPEARE L'ANCIEN)と題されていて、これはアイスキュロスのことを指す。この巻はアイスキュロスのために設けられた巻であるわけだが、先に紹介したギリシア語の長い単語の話、ソクラテスとゼノンの誓いの話、アイスキュロスの死の話はこの巻の中にある。アイスキュロスの逸話が漱石の目にとまることになったのも、ユゴーがこの詩人を特別扱いしたおかげと考えることもできるであろう。

高名なユゴーによるシェイクスピア論であるから、漱石が『シェイクスピア』を購入しようと思ったのは自然なことであろう。漱石は明治36年の9月から、東京帝国大学文科大学の一般講義としてシェイクスピア作品の評釈を行っており、『シェイクスピア』を入手したと思われる明治38年の11月ごろは『テンペスト』の講義を行っていたようである。39年1月からは『オセロ』に移っている(『漱石全集』第二十七巻、「年譜」、629-635頁)。その講義の参考として『シェ

イクスピア』を購入したのかもしれない。

漱石が『シェイクスピア』を読んでいたことを前提とすると、関連する漱石のメモ書きが見つかる。『漱石全集』第二十一巻に収められている、漱石が作った「ノート」の一節である。

○Academy Feb. 22, 1902. Victor Hugo. God, Aeschylus, Shakespeare, Hugo ト威張レル彼ハ只空言ヲ甘〔うま〕クカザリ立テタル平凡ノ思想家ノミ。仏人ハ Lamartine, Vigny ヲ賞セズシテ此人ノ為ニ百年祭ヲ執行シ之ヲ目シテ greatest genius トナス心得難シト。 Lombroso p.46 Dumas ノ criticism ヲ見ヨ

（『漱石全集』第二十一巻、381 頁）

「Academy」は、イギリスで発行されていた文学の書評を中心とする定期刊行誌、*The Academy* のことで、漱石がメモを残した 1902 年 2 月 22 日付けで発刊された第 1555 号の冒頭には、ユゴーの記念碑が次週に落成式を迎えることを伝える記事がある¹⁹⁾。

「Lombroso p.46 Dumas ノ criticism」とは、『漱石全集』の注によれば、ロンブローゾ『天才』で引用されている、デュマによるユゴー評のことである。『天才』を参照してその内容を簡単に言うと、次のようなことである。ユゴーは自分が最も偉大な詩人であり、最も優れた人間（いわば超人的な天才）であると思っていた。彼の自然の見え方はほかの人間とは違っていた。彼の目はすべてのものを大きくした。草は木の高さに、虫は鷲の大きさに見ていた。

この *The Academy* の記事にもロンブローゾの該当箇所にも、アイスキュロスとシェイクスピアは出てこない。したがって、これまでの議論を踏まえるなら、このメモ書きの二人の名前の出所はユゴーの『シェイクスピア』であると考えるのが自然であろう。

漱石のメモ書きを読めば、ユゴーに対してかなり否定的であることがわかる。漱石がユゴーの著作をどれくらい読んでいたのかはわからないが、この否定的な見解はほぼ『シェイクスピア』によるものではないだろうか。漱石の『シェイクスピア』手沢本には多くの書き込みがあるが、ほとんどはメモ書きのなかであ

る。そのうちの三つは『漱石全集』に翻刻されている。漱石の感想と言えるものは、その中の二つぐらいのものである（『漱石全集』第二十七巻、154頁による）。

○Hugo ハ自分ノ言フテ居ルコトヲ解スルヤ否や（77頁5行目以下）

○Hugo ノ文ハエラサウで少しも判然しない。（96頁）

否定的なコメントであることがわかる。書き込み全体を見ても、肯定的なコメントは見当たらない。この二つは特定の箇所につされたコメントであるが、『シェイクスピア』を読んでみると、作品全体に対するコメントのようにも思えてしまう。自身の講義の参考のために購入した可能性のある『シェイクスピア』であるが、漱石ががっかりしたであろうことが想像できる。上述のように、この書を読んでシェイクスピア作品の理解が深まるということは考えにくい。さすがの漱石も、ひたすら続く該博な知識の提示と、趣旨のつかめないただただ高揚した物言いに辟易したのではないだろうか。

おわりに

論を閉じるにあたって、いくつか気づいたことを述べたい。本稿でもその一端を示したように、『猫』には古代ギリシア・ローマに関する話題が数多く出てくる。稿者は、アイスキュロスの逸話の材源を特定できなかった時期、漱石は古代ギリシア・ローマの逸話集のようなものを所有していて、その中から『猫』の材料を得ていたのではないかと考えていた。漱石の蔵書リストや購入リストを見るかぎりではそのような書物は見つけれないのであるが、そこにはない何らかの書物を所有していたのではないかと、常々思っていた。今回の研究の結果からすると、どうやらそのようなことはなさそうである。むしろ、そのときたまたま読んでいて興味を引かれたものを、『猫』に利用しているという印象を受けた。『猫』は綿密な計画に基づいて執筆されたのではなく、その場その場の出会いや発見から発想して書かれている面が強いのではないだろうか。

もうひとつは、漱石は古代ギリシア・ローマに関することがとくに好きだったようだということである。『シェイクスピア』には、古代以降に関する事柄もた

くさん出てくる。にもかかわらず、取り入れられているのは古代ギリシアに関するものだけである（精査したわけではないが、おそらくそうである）。『シェイクスピア』ではアイスキュロスなどの古代の事柄が重視されている面があるが、漱石は古代以外の要素も利用しようと思えば利用できたはずである。当時の『猫』の読者は、古代であれ近代であれ、西洋の事物に関する知識は乏しかったはずなので、古代だからとくに物珍しかったわけでもないであろう。漱石が何を提示しても、それはたいていの場合ペダントリーとして受けとめられるのである。そうした中で古代ギリシアに関する事柄ばかり選んでいるということは、漱石が古代ギリシアに関するものをとくに好んでいたということになる。当然ながらその理由はわからないが、シェイクスピアなどの英文学、ひいては西洋文学を広く学んでいた漱石は、古代ギリシア・ローマに関する教養が西洋の諸物の土台となっている場合が多いことに気づいていたことだろう。もっとも、漱石が選んでいる事物はどちらかといえば滑稽なものが多いので、純粹に古代ギリシア・ローマに関する逸話が面白かっただけかもしれない。

漱石の『シェイクスピア』の利用はごく部分的なもので、この書を詳しく調べても、これ以上なにか新しいことが発見できる可能性は低そうである。上述のように、『猫』には古代ギリシア・ローマに関する事柄が多く出てくるが、今後もそれらの材源を明らかにしてみたい。たとえば第七章では、ハンニバル（第二次ポエニ戦争でのカルタゴ軍の将軍）がイタリアに侵攻するためにアルプスを越えたときのエピソードを猫が語っている（『漱石全集』第一巻、297-298頁）。大きな岩が通行の邪魔になっていたために、酢をかけて火をたくことで岩を柔らかくして鋸で切ったという話である。この話の古代における典拠はリウィウス『ローマ建国以来の歴史』21.37であるが、漱石が直接リウィウスを参照したとは考えられない。近代の何らかの書物や雑誌が直接の典拠だと思われるが、稿者はそれを見つけないことができていない。その材源が明らかになれば、『シェイクスピア』の場合のように、『猫』のほかの箇所や漱石のほかの著述の典拠を明らかにすることができるかもしれない。

注

- 1) 以下、漱石の著作の引用には1993-2004年刊行の岩波書店版『漱石全集』を用いる。漢字は適宜現行のものに改め、ルビは必要なもののみ残して〔 〕で示し、あとは割愛する。
- 2) この逸話は古くから知られているもので、現存の文献で最も古い言及は、ストバイオス『詞華集』4.98.8に引用されている前3世紀前半の風刺詩人ソタデスの詩の一節である。古い典拠としては、紀元後1世紀前半のウァレリウス・マクシムス『著名言行録』9.12・異国部2が最も一般的な話形（『猫』で語られているような話形）を伝え、ほかにはプリニウス『博物誌』10.7、アイリアノス『動物奇譚集』7.16などにも言及がある。
- 3) 拙論『『吾輩は猫である』の二つの逸話の材源について—アイスキュロスの死とアグノディケー—』『西洋古典論集』24、2016年、47-65頁。
- 4) 先行研究の詳細については拙論にゆずり、ここには概要だけを記す。淮陰生（英文学者の中野好夫と考えられている）は、岩波書店の『図書』に連載していた「一月一話」の1975年4月の稿「アイスキュロスと亀と漱石」でブラウン『俗謬論』の可能性を指摘したが、この時点では否定的であった。のちに『俗謬論』の否定的な見方を訂正し、さらに文芸評論家の木村毅からランダーの『ペリクレスとアスペシア』の可能性について指摘があったことを記している。「一月一話」は1978年に岩波新書にまとめられ、さらに『完本 一月一話 一読書こぼればなし—』という単行本（岩波書店、1995年）にまとめられている。1993年の岩波書店版『漱石全集』第一巻の注解は、本稿の本文に示すように古代辞典の縮約版の可能性を指摘している。塚本利明「食材としての孔雀—漱石における想像力的一面」（『人文科学年報』39、専修大学人文科学研究所、2009年、のちに『漱石と英文学Ⅱ』（彩流社、2018年）に所収）も、古代辞典の縮約版を支持している。中務哲郎「漱石とギリシア奇談」（『図書』753号、岩波書店、2011年、のちに『極楽のあまり風』（ピナケス出版、2014年）に所収）は、ブラウン『俗謬論』説に傾いている。
- 5) 岡三郎『夏目漱石研究』第一巻、国文社、1981年（「図書購入ノート」の翻刻を含む「イギリス留学前半の漱石のこころの明暗」を所収）、204-206頁。
- 6) 中務哲郎訳『蜂』（『ギリシア喜劇全集2』、岩波書店、2008年所収）、18頁。この箇所に付された注によれば、ブリュニコスは初期の悲劇詩人で、『フェニキアの女たち』という彼の作品の中にシドンの町を歌う詩句があり、長く愛唱されていた。また中務氏の本作品の解説（同書353-354頁）によれば、アリストパネスが作った新造語には、この語よりもさらに長いものがあるとのことである。
- 7) 岡三郎『夏目漱石研究』第一巻（注5に前掲）。同「新資料・自筆『蔵書目録』からみる漱石の英国留学—Malory購入時期などの確定」『英文学思潮』、青山学院英文学会、1986年、1-19頁。飛ヶ谷美穂子『漱石の源泉』、慶應義塾大学出版会、2002年（「漱

石自筆図書購入ノート 翻刻」を所収）。

- 8) 飛ヶ谷美穂子「諧謔の構造ー『サンドラ・ベロニ』と『坊っちゃん』ー」（前掲書所収）、69 頁。
- 9) 『シェイクスピア』の書き込みのうち 3 つは『漱石全集』第二十七巻に翻刻されている（154 頁）。
- 10) 証拠とは言えないが、『シェイクスピア』では長い新造語の意味が記されていないことを指摘しておく。『シェイクスピア』が材源であるなら、漱石はこの語の意味を知らなかったはずである。もしそうなら、苦沙弥先生が「意味はしらん。只綴り丈知つてゐるんだ」と言っているのは当然である。また、本文でも触れたように、『シェイクスピア』の情報だけに頼ると、新造語の作者がアリストパネスであることがわからない。『猫』のこの箇所にはアリストパネスの名前が出てこないのも自然なことである。
- 11) ただし、ウェアリウス・マクスムス『著名言行録』9.12・異国部 6、伝ルキアノス『長寿者づくし』25 などには、前 4/3 世紀の喜劇詩人ピレモンの死の逸話として、まったく同じ死因が紹介されている。
- 12) 水落健治、山口義久訳『初期ストア派断片集 2』、京都大学学術出版会、2002 年、10 頁。
- 13) 英訳書の out of a silver basin は原著では dans un bassin d'argent である。この要素は古代にはなく、歴史上のどこで加わったのかはわからないが、有名なジョン・ランブリエールの辞書（John Lemprière, *Bibliotheca Classica*, Reading, 1788）のクリュシッポスの項にも同様の記述があるのを見つけた（figs on a silver plate と書かれている）。なお、「はじめに」で紹介した漱石が所有していたスミスの古代辞典の縮約版を見てみると、クリュシッポスの項にはこの逸話はない（ちなみに、スミスの辞典にはこの逸話が紹介されているが、「銀の器」への言及はない）。
- 14) 細かいことだが、『猫』でも『シェイクスピア』でも長い新造語は、Archaioemesidonophrunicherata という綴りになっている。「-mele-」の部分は、『シェイクスピア』の脚注のギリシア語では「-μελή-」となっている（これをふつうにラテン文字で表記すれば「-mele-」になる）。アリストパネス『蜂』のこの箇所にはテキストの異読として「-μελι-」という読みがあり、現在はこちらの方が普通のような場合、ラテン文字で表記すると「-meli-」となる。証拠とは言えないが、この綴りの点でも『猫』と『シェイクスピア』は一致していることを付言しておきたい。
- 15) ユゴーが何を参照したのかは不明だが、古代の典拠はある程度わかる。プラトンの対話編の登場人物としてのソクラテスは、たしかに犬にかけて誓っている（『ソクラテスの弁明』22A、『国家』9.592A）。ストア派の創始者であるゼノンについては、犬にかけて誓ったソクラテスをまねて彼はケイパーの木にかけて誓ったという古代の証言がある（アテナイオス『食卓の賢人たち』9.370c、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』7.32）。伝承の過程でケイパーがなぜか山羊と誤って伝えられたも

のと思われる。

- 16) 『猫』第八章の、語り手の猫がインスピレーションについて論じている箇所、「聞く所によればユーゴーは快走船の上へ寝転んで文章の趣向を考へたさうだから」という一節（『漱石全集』第一巻、322 頁）があるが、この記述は『シェイクスピア』とは関係がなさそうである。稿者にはこの記述の典拠は不明である。
- 17) この古代辞典の漱石手沢本を見たところ、アイスキュロスの項には下線や傍線はなかった。漱石がこの辞典を参照していた可能性が高いことは、拙論の 57-58 頁を参照。なお、拙論では、アイスキュロスの禿頭への言及がないことを理由に二つの漱石蔵書を材源の候補からはずしたが、古代辞典と両方参照すれば材源の可能性となることに当時は思い至らなかった。その可能性は否定できないとしても、今回『シェイクスピア』という非常に有力な材源の候補が見つかったため、やはり『猫』第八章の逸話の材源としては『シェイクスピア』と古代辞典の二つと考えるのが妥当であろう。
- 18) この作品に関する情報は、*Dictionnaire Victor Hugo* (sous la direction de Claude Millet et David Charles, Classiques Garnier, Paris, 2023) の項目、“*William Shakespeare*” (pp. 1074-1075) による。この作品には本間武彦氏による古い邦訳（『ユーゴー全集 第三巻』、ユーゴー全集刊行会、1919 年 所収）があり、作品の全体像を把握するために利用させていただいたが、翻訳はあまり信頼できないものに思える。
- 19) *The Online Books Page* というウェブサイトにて、電子化された *The Academy* のリンクがあり、そこから記事を読むことができる (<https://onlinebooks.library.upenn.edu/webbin/serial?id=theacademy>)。記事の後半では、ユゴー百年祭に合わせて、ユゴーの生前未発表断片集が出版されることを紹介し、その内容を簡単に説明している。

キーワード：夏目漱石、『吾輩は猫である』、ヴィクトル・ユゴー、アイスキュロス、
材源

Victor Hugo's *William Shakespeare* as a source for *Wagahai ha Neko dearu*: Rethinking the source of the anecdote of Aeschylus's death

GONJOI Masahiro

In the eighth chapter of *Wagahai ha Neko dearu* (*I am a cat*, hereafter *Neko*) by Natsume Soseki, published in January of 1906, a peculiar anecdote about Aescylus' death is introduced by the cat narrator. This narrative, which has been transmitted from antiquity, recounts the demise of the Greek tragic poet Aeschylus, who, according to the account, was killed by a tortoise that an eagle had dropped down onto the poet's bald head, mistaking it for a rock. A preliminary investigation into the origins of this account by Soseki revealed that the source was a passage in Victor Hugo's *William Shakespeare* (hereafter *Shakespeare*), a critical work encompassing a broad array of subjects, extending beyond the confines of Shakespearean studies. The poet's death is recounted in the section of the work devoted to Aeschylus. The following arguments support this assertion. Firstly, it is attested that Soseki obtained a copy of the English translation of *Shakespeare* by the time he was writing the eighth chapter of *Neko*. Secondly, it is evident that two passages in the seventh and eighth chapters of *Neko*, specifically the dialogue concerning the longest word in the world and the reference to the death of Chrysippus, are derived from the accounts in *Shakespeare*. Given the paucity of information regarding Aescylus's death in *Shakespeare*, it can be posited that Soseki sought further information about the poet's demise by referring to the article of Aescylus in a dictionary of the antiquity, a copy of which he possessed in his library at the time.